

鈴木 一平

1. 事業実施の目的

クリスの考古学的研究のための実地調査

2. 実施場所

マレーシア（クアラ・ルンプール、ペラッ、ムラカ、ジョホール）、シンガポール

3. 実施期日

2024 年 7 月 23 日（火）～ 2024 年 8 月 7 日（水）

4. 成果報告

●事業の概要

本事業の活動として、①マレーシアにてクリスの資料調査・生産地調査のための予備的調査と、②シンガポールにてクリス関連品である陶磁器調査を実施した。

①クリスの資料調査・生産地調査のための予備的調査（マレーシア）

現在のマレーシアはインドネシアと並んで歴史的なクリスの生産・消費地の一つであった。報告者はこれまで、マレーシア産のクリスについて日本所蔵品を中心に 7 点の調査をおこなった経験があるが、現地博物館施設でのクリスの所蔵状況、また現在の産地状況などについての調査は未着手であった。ここでは、博物館とクリス工房を訪問し、クリスに関する具体的な情報収集をすることで、資料調査を含めた将来的な本調査のための予備的調査をおこなうことを目的とした。

具体的には A.クリス所蔵状況の確認とマレーシア研究者とコネクションの構築、B.クリス生産地の訪問、の 2 つに分けられる。

A. クリス所蔵状況の確認とマレーシア研究者とのコネクション構築

国立博物館（Muzium Negara, クアラ・ルンプール）、マラヤ大学付属アジア美術館（Muzium Seni Asia）、ペラッ博物館（Muzium Perak）、マラカ王宮博物館（Muzium Istana Kesultanan Melaka）、マラカ歴史民族誌博物館（Muzium Sejarah dan Ethnografi）を訪問し、所蔵資料の確認と現地研究者との接触をおこなった。

B. クリス生産地の訪問

ペラッ州のクリス職人 A.M.氏の工房を訪問し、コネクションを構築するほか、断片的ではあるがクリス生産の状況を確認した。

②クリス関連の陶磁器調査（シンガポール）

15 世紀-16 世紀初頭のベトナム陶磁器には、ジャワ向けに生産されたと考えられる製品

群が存在する。そうした製品のうち、報告者は特に跪坐（片膝を立てて跪く姿勢）でクリスを背に差した陶製人形に注目して研究を進めており、石彫資料との比較から、ジャワでつくられた門番像をモデルに、ベトナムへ特注されたものである可能性が高いことが明らかになった（2024 年東南アジア考古学会大会にて発表）。本タイプのベトナム産陶製人形は世界に 3 つの伝世例が知られており、その一つがシンガポールのアジア文明博物館（Asian Civilizations Museum）に所蔵されている。本事業の活動として、所蔵館の許可を得た上で、当該資料の熟覧と三次元計測のためのデジタル画像の撮影を実施した。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって、報告者の研究課題の有効な以下の成果を得ることができた。

①クリスの資料調査・生産地調査のための予備的調査（マレーシア）

本調査では、先に述べた 5 つの博物館を訪問し、展示の見学と所蔵資料の確認により、主要な資料についての情報を得ることができた。特に、ペラッ博物館では *Keris and Other Malay Weapons* (1936) の著者である G.B. Gardner のコレクション（クリス 11 点、その他 14 点）の熟覧調査が実現した（図 1）。これらは 20 世紀前半期という収集年代が明確な資料として重要であり、当該時期のマレーのクリスを知る上で有益なデータを得ることができた。

ペラッ州クアラ・カンサルでは、クリス職人 A. M. 氏の工房を訪問した。2 日間の滞在であったが、ある程度の信頼関係を構築できたほか、クリス生産のための道具や、工程の一部も確認できた（図 2）。今回の訪問により、今後改めて調査をおこなう際は事前の連絡が可能になり、スムーズな調査ができる状況となった。また当初の予定ではジョホール州パトゥ・パハットでもクリス職人を訪問する予定であったが、現地にいくと工房の建物ごと無くなっていた。近隣住民に聞いたところ、別地域に転居したとのことであった。新しい住所について聞き込みを続けたが、移動日までに有効な情報に達することができなかった。



図 1：ペラッ博物館での調査風景



図 2：A.M. 氏の工房の風景

②クリス関連の陶磁器調査（シンガポール）

シンガポールのアジア文明博物館にて、15 世紀後半期のベトナム産青花人物像（2004-00904）の熟覧調査が実現した。これにより、人物像の詳細な構造が明らかになり、成形方法の想定が可能になった。また今回は回転台をもちいた撮影も実施し、三次元計測に必要な画像データを取得した。現在専用ソフトでデータの分析中であるが（図 3）、高精度での三次元計測ができる見込みである。このように、基礎的情報をできるだけ資料に負担をかけない形で取得ができたことは大きな成果である。今後、別博物館に所蔵されている類例 2 点の調査をおこなったのち、研究論文の作成を目指したい。



図 3：三次元モデルの作成

●本事業について

本調査は、報告者一人では決して成し得ないものであった。特にペラッ博物館館長のナスルル氏、館職員のスルヴァラジュ氏には大変お世話になった。ペラッ博物館での調査実現の背景には、報告者の指導教官である小野教授の紹介があったことも付け加えたい。また鍛冶職人の A 氏には、突然の訪問であったにも関わらず快く工房を見学させていただいた。シンガポールでの調査では、数カ月前から資料調査の調整と立ち合いを担当してくださったアジア文明博物館学芸員のルイズ氏、当日の調査補助をしてくださった 2 人の職員さんに感謝を述べたい。この場を借りて、皆様に心からお礼を申し上げる。

また、本事業による助成のおかげで、金銭的な制限によって調査が実現できない、というような事態を避けることが出来ていることは、大変恵まれていると感じている。本事業に関わる皆様に感謝を申し上げる。加えて、いつも快く対応してくださる事務方の皆さまにもこの場でお礼申し上げたい。